
月下美人

長月 夕子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下美人

【Nコード】

N3355E

【作者名】

長月 夕子

【あらすじ】

月下美人をめぐる三つの話。第一話下宿屋の娘とそこで暮らす大學生の話。

第一話 月下美人

祖母の下宿屋は、子供の頃から私にとって良い遊び場だった。

共働きの両親、兄弟もない私は親が夜遅くに帰ってくる迄、下宿の大学生達と夕食も共にした。彼らは子供だった私を邪険にすることもなく、ゲームをしたり、大阪弁を教えたり、マンガを快く貸してくれた。私は下宿がとても好きだったが、祖母の年と共に縮小し、やがて最後の一人となった。

真一さんがここに来たとき私は16歳で、入学早々躓いた数学を熱心に教えてくれた。ともすると無表情で冷たい印象のメガネの奥の細い目と薄い唇は、私が自力で数学の問題を解くと、ふっと細めて優しく微笑む。その笑顔が見たくて私は熱心に数学を勉強した。真一さんはその時20歳。物静かで、鉢植えの月下美人を大事にしている様な人だった。毎年年花を見事に咲かせ、祖母も私も短く美しい花の命を愛でる贅沢を真一さんに教わった。実用一辺倒花より団子の祖母でさえ、美しさにうっとりとう瞳を潤ませた。細く白い花びらは、真一さんの指のようで、なるほどその繊細さは真一さんの好きな花だと思つたものだ。

やがて真一さんは卒業と同時に下宿を後にする。

それでも近くのアパートで一人住まいの居を構えると聞いた時、私の胸は躍った。会えなくなるわけではない。これまでと変わらず、数学を教えてもらつたり、音も眠る深夜に息を潜めて月下美人を見ることがもできるのだ。

ところが真一さんは首を横に振った。

「どうして遊びに行つてはいけないの？」

私は少し、いやかなりわがままに真一さんを困らせた。どんなに言つても聞かない私に

「それではこれをおいていきましよう」と私に月下美人の鉢を託した。

「この花が開くとき、またお会いしましょう」
とその言葉が私の耳に吹き込まれた。優しくかすれた声と温かい唇がそっと耳に触れた。

月下美人が一年ぶりの重たげな蕾を抱いている。
おそろく咲くだろう。

大きな紙袋に月下美人を移し、私はそっと鉢をかかえ上げる。知っていたながらこの一年一度も通らなかつた、アパートへの夜道を行う。心は急ぐが、蕾が折れてしまつては元も子もない。アパートのドアの前で私は深呼吸する。手がとても冷たく、ドアベルを押す指が細かく震える。ドアがそっと開く。

「月下美人、咲きましたよ、真一さん」

少しやせたあの人は、それでも変わらずに目と唇をすつと細めて微笑んだ。そして月下美人のようなその指で、私の長い髪を一筋掬うと「冷たい髪…」と呟いた。

第二話 秘密（前書き）

月下美人をめぐる三つの話。

第二話 大学生の側から見た第一話「月下美人」の情景。第一話を先に読んで下さい。

第二話 秘密

月下美人。部屋の電気を消すと、満月に照らされて、切れるような白い花びらの美しさが際立つ。真一は本棚から太宰治を二冊取り出すと、下宿の毛羽立った四畳半の畳の上に放り、無造作に重ねた上へ鉢を置く。この花にはこれくらいがちょうど良い。

俯いた花を見下ろす。重たげな花をそっと包むのは、まるで人の手のようだ。

女の手はこうあるべきだ。こういう手を持つ女を一人だけ知っている。母。記憶の中の母の手はただただ白く細く、影すらないほど完璧だった。斜陽に包まれた母の背中。上下する肩。機械の音がする呼吸。束ねられたつやのない髪。そこに含まれていながら別世界に存在するようだった母の手は、母が持っていた唯一の美しさだった。いや、その手が、母を属させていたのかもしれない。

花びらに触れようと手を伸ばすと、月の青い光が真一の手をなぞる。母から受け継いだこの手。彼の手もまた、完璧だ。花には触れずに手を引き寄せ、そのまま口付ける。薄い皮膚に暖かい呼吸。そのまま花びらをなでるように唇で指をなでた。美しい。

机の引き出しから小さな木箱を取り出す。彼の手が木箱の蓋をなでる。右に左に。いつかの母のように。そこから遺品の手鏡と紅を取り出す。

中指で紅を掬い、唇に乗せる。右に左に。柔らかい唇をなぞる指は真一ではなく母の手だ。甘い香りが通っていくと、口元を映す手鏡の中で、女が微笑む。

女の唇はこうあるべきだ。微笑を絶やさず、薄く開かれたその奥は闇。何を隠して微笑むか。

襖の向こう、階下から忍ぶ足音が真一の部屋に近づいてきた。すすすつとつま先で擦るような密やかな音。やがて、躊躇いがちに伺う。「あの……真一さん？」

下宿屋の娘。束の間は日常に毒される。真一は手鏡の中の唇を見つめながら、いつもの通りに答える。

「起きてますよ、何ですか？」

「数学を教えてもらいたいと思って」

「今行きます。食堂で待っていてください」

「はい！」

弾んだ声そのまま足音に変わり、とんとんとリズムよくそれは遠ざかる。階段を下りていく娘の白い靴下が目に浮かぶ。教えてやらなきゃいけないのは、汚れないということは美しさで違ふということ。

月下美人は全ての指を開いて、その奥を彼に見せようとする。花びらをこすり合わせ、身悶えながら花開くその様は、慎ましく美しい。だがまだその時はこない。

紅をぬぐったハンカチに目を落とす。まるで母の溢した血のようだ。

第三話 嘔吐（前書き）

性表現が含まれます。15歳以下回れ右。嫌いな人も飛ばしてください。

第三話 嘔吐

片田舎の繁華街、塾への道を急ぐ俺の視界に、派手な身なりでだらだら歩く女の姿。母の葬式に涙一つ零さず、「つまらない人生」と切つて捨てた女。母の十歳下のこの女が、俺の叔母であることが耐えがたかった。

「あんたみたいな子供の世話に明け暮れて死んじゃうなんて、馬鹿みたい」

叔母は母を侮辱した。

「あら、真一、お久しぶり。何年ぶり？」

「二年ぶりですね、母が死んだ時以来ですから」

「そんなになるの？早いものね。あんたもオトナになったかしら？」

「未成年なんで世間的には子供でしょうね」

「いいわね、未成年。そういう逃げ道があるってうらやましいわ」

「そういえば叔母さんの弟さんのことだけど」

「はあ？何言ってるの？私はあんたのお母さんと二人姉妹でしょうが」

「そうですね、以前男の人と二人で歩いているのを見かけたんで」

「あんた馬鹿ね、普通そういう時って恋人だと思つものよ」

「だけどその男の人が、あそこへ若い女の人と仲良く入つていく所を毎週見かけるんで、そちらの方が恋人かと思つて」

俺はそう言つと、いかにもいかがわしい繁華街の一角の派手なホテルを指差した。叔母の顔から見る見るうちに色が消えていく。

「あんた、何言っているかわかつてんの？」

「さあ？未成年ですから」

言い捨てるとそのまま叔母を置き去りにした。俺は暫く平静を装つて歩いたが、ついに我慢できなくなつて、周りが訝しがるのも気にせずその場で声を上げて笑い出した。馬鹿な女。男がいなくちゃ生

きられない。あんな馬鹿を、俺が相手にする必要なんてないんだよ。

萩が咲く家路。母が死んだ十三歳の秋も、こうやって風が花を揺らしていた。十六夜の月が、俺の感傷を後押しする。ぼんやり灯る門燈の下の、ぐるぐる円を描く虫を払って戸を開けた。

玄関には父の革靴と、見慣れぬ赤いハイヒール。二階からかすかに聞こえる、物音。

俺は一段一段ゆっくりと階段を上る。心臓の音が鼓膜を打つ。手のひらが汗ばむ。かつての母の部屋の襖は、開いていた。

文机に置かれた月下美人の鉢ががたと音をたてている。叔母の裸の足が父の腰にからみ、白い腕が蛇のように首へ巻きついている。激しい息遣いの中、「もっともっと」と上擦る声の間で、叔母が俺を見た。

背を仰け反らせ嬌声を上げながら、視線を俺から外そうとはしない。

胃の底をねじりながら喉の奥がせりあがる。叔母が俺を見ている。その白い腕。その強い香り。月下美人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3355e/>

月下美人

2010年10月9日05時48分発行